

古文

<解釈例>

【公募推薦A (11/19)】国語②

信貴山の毘沙門堂で、四季連歌の句合が行われた。その中に、

五月雨に年中の雨降りつくし

という句があった。なんとか言う大納言が、お聞きになって、「何者が申し上げたのであろうか。この句の詠み主を探せ」と（おことばが）あった時、高橋なんとかという人が、そのつながりがある者にたずねたところ、「あの附近にいる村長が（詠み）申しあげた句である」といって、（大納言は）わざわざ御使者に届けさせる手紙をお与えになって、「もし京へ出てくることがあったら、必ず（私の元に）参上せよ」とあったため、たいそうもったいなく思って、その村長は、わざわざ京へ出てお訪ね申し上げると、「それならば、（その村長と）会って話をしよう」といって、一間にお通しくださると、村長が言うことには、「風流な名誉が、宮中にまで噂になっていたことは、たいそう勿体ないほどと（私は）思い申し上げます」といって、大納言も、あちらこちらの話があって、そうしてお尋ねになることは、「年中の雨と言った工夫は、趣深く思われるので、その句意を聞きたくございますので、お会いも申し上げたのです。どのような故事があって、このように申し上げたのか」とあったところ、村長が答えて言うことには、「特に故事と申し上げることもございません。ただ五月雨が昨日も降り、今日も降り続けて、明日もまた、このように一日中降り続けたならば、一年の雨も、最近の五月雨で降り尽くしてしまうだろうと思われました心から、申し上げた以外に思惑はないのでございます」と申し上げたところ、「趣深く思われるのである」といって、（奥の部屋に大納言は）お入りになった。村長が帰った後に、高橋が出て来て、「どういう事ですか」とお尋ねしたところ、大納言がおっしゃることには、「そうかといって、私が思っていたこととは違っていた。五月雨には、四季のように、雨の様子が様々に降っていたために、春雨の寂しさに比べ、夏の夕立になぞらえ、秋の雨の物寂しさを嘆き、冬の雨の寒さにもたとえている。このことは、古い物語に（その記事が）あるので、それを知った句であらうかと知りたく思い、尋ねましたけれども、そうではなくて雨がただ降り尽くすとばかり作ったことのため、「古き物語」に書かれた内容との偶然の一致を）おもしろく思いました」とおっしゃった。

【公募推薦B (11/20)】国語②

小野小町は容貌が美しく、局や腰元といった女房が左右に付き添い、侍や若党といった者たちが前後を囲んで（警備をし）、家には鼈甲細工を飾り、座る場所には宝石を並べ、壁には漆喰を塗り、垣根を赤や青で描き、軒先には琥珀を並べ、簾には玉をたらし、衣装に贅沢をし、飲食に満ちたりるほどで、本当にすばらしい身の上であったので、宮中の人々が気に掛けないということはなかった。中でも深草の四位の少将という人は、一途に思い込んで、多くの手紙を送り、心のありったけを尽くして、恋い焦がれ思い沈むと伝えたけれども、小町はますます薄情に「みすばらしい姿で我が家の牛車の榻の所まで百晩通ってください」とだまして、「諦めてくださいよ」とたくらんだが、（少将は）本当だと思い、はだしで歩いて、竹の杖・笠・蓑に姿を目立たなくし、月夜にも出かけ、闇夜にも出かけ、雪（の降る夜）には（雪の積もった）袖を払い、雨の降る夜には目には見えない（物語に言う）鬼の一口も恐ろしく思うのだが、日暮れになると「忙しい、待っているから」とこっそりと出かけ、夜明け前ごとの帰り道で、一段と重くなった袖の露、例えようもない涙で、「鳥も鳴け、鐘もただただ鳴れ、夜も明けろ」と心を

尽くしながら、榻の数を数えると、九十九夜になった。今となってはもう一夜と（少将は）うれしくて、待つ日になって胸が痛み出し、とうとうお亡くなりになる。迷うと悲しい恋路であると噂になった。

栄え（た者は必ず）衰えるのはこの夜のしきたり、（小野小町は）四位の少将の因果応報の罪がその身に積もって錦の敷物での起き臥しからうって変わって、関寺のあたりのみずぼらしい小屋をこしらえて住んでいたが、小野小町と知る人はいなかったが、頃は七月七日、関寺の僧たちが児たちを誘って星に手向ける歌を詠んで、さらに山裾の老女が歌道を極めていることを聞いて、稽古のために訪ねたところ、小町は思いも寄らないことだと申し上げなされたけれども、是が非でもと強いられて「そのだいたいのことを申し上げます」と、神代から始まり、難波津や安積の山の言葉は歌の父母のようなものであることを、（僧たちに）語り申し上げたところ、僧たちは感心して、女の歌はめったにないが、（今聞いた）老女の言葉は（これまでに聞いた）前例が少なく（すばらしく）思われますとあって、「私の恋人がやって来そうな夜である、蜘蛛の振る舞いが今夜ははっきりと目に付くことだ」といった歌を（僧たちが）尋ねなされたところ、小町が答えて言うことには、「その歌は衣通姫の御歌である。私もその流れを汲んでおります」とあったので、僧たちは聞いて、「小野小町は衣通姫の流れと聞いている。これは意外なことだ」と思い、歌に「私はもう疲れてしまったので、我が身を浮き草と思い、その根を断ち切って今いる所を離れ、誘ってくれる水があるならばそのままどこへでも行ってしまおうと思いません」という歌を尋ねなされたところ、「その歌は、文屋康秀が三河国の国守になって下ったとき、『田舎で心を慰めろよ』と私を誘った時に、詠んだ歌である」と（老女が）申し上げなされたので、僧たちは驚き、「わびぬればの歌を私が詠んだとお聞きしたことは、それでは（あなたは）小町でいらっしゃるのか。ちょうど今日の乞巧奠、手向けをする舞樂を舞ってください」とあって、胡蝶の舞を望んだということである。

国語 解答例〔A方式 11/19〕

解答例

①	(1) 3	(2) 5	(3) 1	(4) 3	(5) 4	(6) 1	(7) 5	(8) 2	(9) 3
	(10) 3	(11) 6	(12) 2	(13) 4	(14) 1	(15) 5	(16) 3	(17) 1	(18) 2
	(19) 4	(20) 3	(21) 2	(22) 5	(23) 4	(24) 1	(25) 3		
②	(31) 2	(32) 3	(33) 5	(34) 2	(35) 4	(36) 1	(37) 3	(38) 5	(39) 4
	(40) 2	(41) 3	(42) 1	(43) 3	(44) 2	(45) 6	(46) 4	(47) 5	(48) 4
	(49) 3	(50) 4	(51) 5	(52) 2	(53) 5	(54) 4			

国語 解答例〔B方式 11/20〕

解答例

①	(1) 2	(2) 5	(3) 3	(4) 6	(5) 1	(6) 3	(7) 4	(8) 1	(9) 2
	(10) 2	(11) 3	(12) 1	(13) 2	(14) 2	(15) 4	(16) 2	(17) 4	(18) 4
	(19) 3	(20) 5	(21) 4	(22) 1	(23) 2	(24) 2	(25) 3		
②	(31) 1	(32) 2	(33) 5	(34) 5	(35) 3	(36) 1	(37) 7	(38) 4	(39) 1
	(40) 4	(41) 8	(42) 1	(43) 1	(44) 2	(45) 2	(46) 1	(47) 1	(48) 3
	(49) 2	(50) 5	(51) 2	(52) 3	(53) 2	(54) 3	(55) 6		

※古典の現代語訳については6月下旬以降、本学ホームページ内「京女倶楽部」に掲載予定です。